

平面構成から立体構成への展開

—着物のデザイン展開の試み—

富田 弘美 山村 明子 張 明悦¹

平面構成の寛衣の代表例である日本の民俗服飾である着物（長着）に着目して、その設計を立体構成の形式に展開することを試みた。西洋式衣服は身体の形状を衣服で再現、またはよりデコラティブな立体を形作る。本報では身体にタイトフィットなシルエットに、抜き衣紋をイメージした襟部、帯結びをイメージした装飾のドレスを設計した。着物を窄衣形式に展開することで着装を簡便にするとともに、着物を着装した身体イメージをドレスの構造から再現することを検討した。

キーワード：寛衣 窄衣 着物 帯 ドレスデザイン

1. はじめに

衣服形態をその構成上の特徴から大別するとき3種類に分類される¹⁾。服飾材料である布帛を裁断縫製せず、身体に直接巻く、懸けるといった手法で着装する懸衣の形式、体幹部と上肢をゆったりと包む寛衣の形式、身体のラインに緊密に合わせる形状に裁断縫製された窄衣の形式である。

寛衣の形式は体幹部から足元まですっぽりと包み込み、体型をおおよそのサイズで捉えている衣服である。中近東各地に伝わる民族服飾にその例が散見される。例えば、エジプトのガラベイヤなどのように全身をゆったりと覆う形態は、熱砂から身体を保護する効果が高いといわれる。また、中南米グアテマラの貫頭衣形状のブラウスもその例である。比較的構成がシンプルなため、衣服として単純な印象を受ける場合もあるが、例えばグアテマラの貫頭衣は、細密な模様が描き出された伝統的な織物が衣服としての表現性を高めている。寛衣はその形状から着装した体軀を堂々とした風貌に見せる効果や、広い布帛の面積を活かした表面装飾が特徴であるといえよう。

身近な例として日本の衣服である着物（長着）もまた、寛衣の代表例である。この服飾は唐の影響を受けて文化形成を行った奈良朝ののち、平安朝の文化の中で次第に和様の特徴を整えていった。その構成は反物の幅を最大限に活かして、布帛を直線的に縫い合わせている。身体に羽織り、巻きつけ、帯で整えることで、人体に装着している。また、現在の女性の着物は着装するときに着丈を調整する、いわゆる、おはしりをつくる。帯結びと併せて、着付けが難しく動きにくいと感じられ、現代の日常的な装いとしては受け入れにくく、祭り、行事の時の特別な衣服としてみなされている傾向がある。

日本において独自の発展を遂げた着物は近世、近代以降欧米の文化に受容されたときに、洋服文化にも大いなる影響を与えた。特に19世紀後半以降には着物に触発されたドレスデザインが開発されたことがこれまでの研究で報告されている²⁾。それは欧米の文化が着物の形状、着こなし、装飾表現に洋服とは異なる魅力を認識したからに他ならない。ただし、着物と一口に言っても時代や着用者、着用場面によってその表現要素は多様である。本報ではまず19世紀後半にヨーロッパに着物文化を認識させる契機となった浮世絵に

家政学部家政学科

1 東京家政学院大学家政学部家政学科学学生 (2007年度卒業)

着目し、そこに描かれた着物の美的表現を整理する。さらにその要素を現代のドレスデザインに展開し、窄衣形式の簡便な着装、活動的な服装形態を実現し、さらに着物における装飾的要素をドレスデザインに融合させることを目的とする。

2. 着物の特徴

日本の民族服飾である着物は幅9寸5分（約36 cm）、長さ2丈9尺（約11 m）以上の着尺地反物を使用して製作される。長大な布帛を組み合わせて構成される着物の形態は垂れ領、袂袖が特徴的であり、女物の場合は対丈（着丈いっばいに仕立てられた寸法）ではないので、腰の位置におはしよりをして着装する。明治以降幅広、胸高に締められるようになった帯の着用は、次第に着物に着苦しいイメージを与えたが、江戸期までの着装はまたそれとは異なっていた。

江戸期の浮世絵は19世紀にヨーロッパに伝わると多くの芸術家に影響を与え、ジャポニスムと呼ばれる芸術運動の火付け役となった。そしてそれらに描かれた女性と着物もまた新鮮な魅力を湛えていた。当時のヨーロッパの服飾と比較するとその特徴は以下の点にある。

まず形態の特徴があげられる。当時の構築的なドレスラインと比較すると、着物のストレートでかつゆったりとしたシルエットは対照的である。特に浮世絵の女性達は胸元も緩めで、ずりりと着流す姿も多く、印象的だったのであろう。このような形態は、ドレスデザイナー達にキモノコートや室内着としてのKIMONOをデザインさせることになった。また20世紀初頭にはポール・ポワレがストレートなラインのオリエンタリズムなドレスデザインを発表することになる。

次に色彩の特徴が挙げられる。浮世絵の女性は市井の女性と、吉原など遊郭の女性の二通りに大別される。江戸中・後期の江戸市民には、黒、茶、鼠色といった無彩色が流行したことは既に指摘されている³⁾。ヨーロッパの人が目にした着物はこのようなシックな色合いを着こなす女性の姿と、かたや朱色系統の華やかな色彩を着こなす遊郭の女性の姿であった。また、色使いとして無彩色の着物に合わせるはっかけや、長襦袢の衿などに対

照的な朱色系統の鮮やかな色彩を組み合わせる着こなしも特徴的である。

さらにテキスタイルの模様表現にも特色がある。江戸市民には縞、格子柄といった直線的な単純な柄が好まれ、その美意識については九鬼氏が検討している⁴⁾。一方、花魁や太夫には華やかな花模様や、豪快で大胆な模様が入り入れられ、竜や鳳凰といったモチーフが入り入れられた。

また、着物と並び髪形にも特徴がある。日本女性は江戸初期以降、結い上げた髪型をしており、時々流行によっては随分と大型のものも好まれた。また、結い上げる道具と装飾を兼ねて、櫛、簀簪が挿され、立体的な表現が特徴といえる。

3. 制作

1) デザイン・設計

デザインを検討する上で、考慮したことは次の2点である。第一に形態についてである。着物のシルエットをイメージさせる形態を目指す中で、あえて巻きつける着装方法ではなく右脇の位置でファスナーによって開閉するシルエットに変更した。このことにより、着装方法は簡易になる。ストレートなシルエットを意識し、ウエストからのダーツを入れて上半身はタイトフィットに、スカート部は裾に向けての若干の広がりをもつみのラインにした。ドレス丈は床丈である。着物の形状を強く意識させる要素として袂袖が挙げられるが、この作品では敢えて今日的なドレスのイメージを優先し、ノースリーブにした。

その一方、着物の着こなしの特徴のひとつである大きく衣文を抜いた衿のイメージを取り入れた。浮世絵に描かれた女性はなで肩でさらにゆったりと襟元を合わせた着付けのため、襟から肩にかけてのラインはとても緩やかな傾斜を描いている。そこに日本女性の着物の着こなしの特徴の一端を見ることが可能である。このようなイメージを表現することを意識して、ドレスの肩に襟をあわせてみると、実際には意図したラインを得られなかった。すなわち、襟つけ線を身頃に縫い合わせてしまうと、スタンドカラーのように首に沿って立ち上がったラインを描くか、または肩に沿って垂れかかってしまうからである。そこで和装の

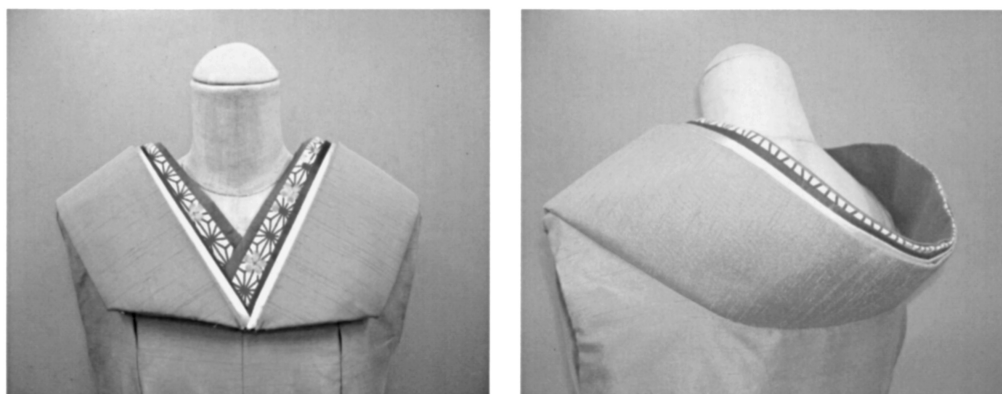


図1 前後の襟の形態

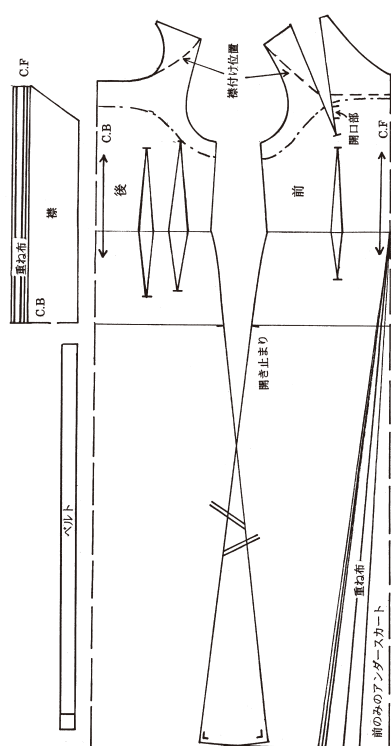


図2 ドレスの製図

ようなで肩のラインを表現するために、約9cmの広幅の襟を肩先まで覆うように配し、ドレスの前肩部にパッドを入れて厚みをつけ、外から観察すると襟端から肩先に向けてなだらかな傾斜となるようにした。デザイン面では伊達衿や襦袢の衿の重ね合わせを表現するように、色彩の取り合わせの効果を狙った5枚の衿を重ねた。(図1)

また、着物の場合では左前の打ち合わせの裾から覗き見える八掛けや長襦袢の色の組み合わせは、通常であれば左裾側に位置するが、ここではスカート部のセンターラインの位置で切り替えを入れた。一見するとアンダースカートを重ねて2枚のスカートを着用しているかに見えるように衿と同様の布を重ねた。構造としてはアンダースカート状の前スカート部分のみをウエストベルトで安定させることで、布の重みを支えてシルエットを安定させた。着物と異なり、足元を乱すことなく軽やかに歩を運ぶことができる。図2に各部位の製図を示す。

第二に着物から発想する装飾要素を検討した。前述したように、着物の装飾は色彩や模様表現といった表面装飾が主体である。日本独自の模様表現をドレスデザインに取り入れた例もこれまでのデザイナーの作品には散見される。しかしこの作品では着物の着装に欠くことのできない副装品である帯に着目した。帯とは本来、幅が狭い紐状のものを腰に巻き前や後ろで結んでいた。その後、江戸初期以降には幅が広くなり始め、歌舞伎役者中村吉弥の風俗に端を発する吉弥結びの流行以降、背面での帯結びが主流になった。この作品では江戸中・後期以降は花魁、太夫の装いに見られた前部で大きく結ぶ帯結びを意識した、大型の装飾を前ウエスト部にデザインした。ドレス自体がストレートなシルエットであるので、極端に大型の帯結びをイメージした装飾品をデザインポイントにすることで、人目を引く華やかさを付加する

効果を狙った。花の形を連想させる立体的な形状を作り、アクセントとして、頭部装飾品である長い簪をイメージする装飾品を何本も挿し加えた。図3に装飾品のデザイン画を示す。



図3 帯風の装飾品

2) 制作材料

若々しくかつ華やかに装うドレスをイメージして、若草色のポリエステルシャンタンを使用した。表布に合わせて黄緑色の裏布（ポリエステル）を選んだ。着物の重ねのイメージを表現するため表布と対照的な茄紺や紫系統の色彩のポリエステルシャンタン、麻の葉模様がプリントされた和風縮緬プリント（ポリエステル）、濃い紫や淡いピンク色のポリエステルサテンを使用した。

帯風の装飾要素であるリボンにはドレスの色に映えるオレンジ系に金糸が織り込まれた金欄（ポリエステル）を主に用い、その裏には鮮やかなオレンジ色のポリエステルサテンを合わせた。装飾的な効果として紫、青系のポリエステルオーガンジーと金色のラメ（ポリエステル）をあわせて使用した。立体的に仕立てるために帯芯（ポリエステル）を用いた。簪状の装飾は木製の棒を芯にして、赤い和紙や茶色のラメ入りポリエステルを貼り、紫、緑、オレンジ系のメタリックヤーンで表面を仕上げた。その他、市販の組紐を帯締めイメージで利用し、飾り結びにした。

開口部にはコンシールファスナーを使用した。

縫い糸はポリエステル100%のシャッペスパン60番を使用した。

3) 縫製

縫製には職業用直線縫いミシン及びロックミシンを使用した。

留意点として、衿の縫製では重ねる布のそれぞれを形作り、後ろネックラインの一部のみを身頃に縫い合わせた。重ね合わせた衿はスナップボタンで数箇所を留めることで、衣文を抜いた状態のたわみを形作った。

また、スカート部の切り替えの補強のために、前見頃の裏面には接着芯をすえた。

4. 着 装

ドレスのデザインポイントである大型の装飾品は、帯をイメージしてはいるが、胴部に巻きつける構造にはなっていない。そこで、装飾品を安定させるために、前身頃の肩ダーツの一部に開口部をつくり、装飾品に取り付けた紐（スーパーファスニング）をその位置に通して、首から提げて安定させた。（図4）装飾品を取り付けることで、華やかな印象のドレスになるが、装飾品をはずすと、タイトシルエットのシンプルなドレスとしても着用することが可能である。図5は装飾品をつけていない状態である。

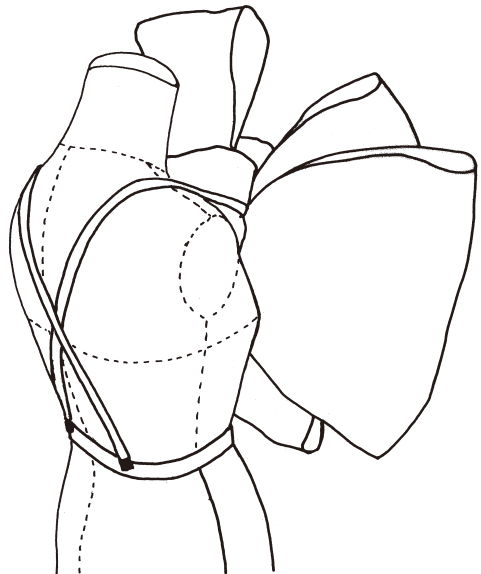


図4 装飾品の着装方法



図5 装飾品をつけない状態

5. 結語

浮世絵を通して19世紀後半にヨーロッパの文化に受容された着物のデザインは20世紀に入るとドレスデザインへと展開された。その際、着物の構造の各部位はデザインソースとして巧みにドレスへと取り入れられた。例えばキャロ姉妹が制作したイブニングドレスをみると(図6)、キモノ風の襟と、打ち合わせ、引き裾が特徴である。ただし、この作品を観察すると、襟は平坦に身体に寄り添い、ドレスとしてはボリューム感に欠けた物足りなさを感じる。改めてドレスと着物との構造の違いによる着装のイメージを検討してみよう。立体を形作る縫製技術によって仕上げられるドレスはダーツなどで身体形状を把握するのみならず、ギャザーやドレープなどの装飾的テクニックを組み合わせて、ボリュームのあるドレスを表現していた。一方、直線的なラインを組み合わせた構成の着物の場合は、衣服のままでは平板なものであるが、着装するとき、皺やたるみを生じさせて身体に適応させる。現代の着付けではこのような皺やたるみは帯などで隠しすっきりと、また身体の凹凸感を強調しないストレートな着こなしが好まれている傾向がある。しかし、江戸の浮

世絵に描かれた女性は大胆に衣文を抜き、胸元を緩め、裾をはだけている。つまり着こなしによって生じた皺やたるみにより、ボリュームをもたせることが可能になるのである。今回の作品では身頃はダーツ処理をして、タイトフィットさせている。しかし、身体の形状をそのままを表現した場合、図6の例のように、着物のイメージとは異なってしまうのである。そこで、前肩にパットを入れて身体に厚みをつけ、襟のラインで覆うことで着物によって表現される日本女性の身体イメージを再現することが出来たと考える。

このドレスの装飾のポイントは大型の帯状の飾りである。19世紀以降に、帯からインスピレーションを得たであろうドレスには、図6のようにストレートなシルエットの中にもウエストをマークしたデザインが登場した。しかし、本報の作品では、帯はウエストを緊縛する手段としてではなく、あくまでも飾り結びのイメージのみを重視し、大型のコサージュともみなせる装飾品として展開した。装着方法の工夫により独創的なデザインポイントとなった。

作品は2008年2月卒業制作発表会、ファッションショー“Cell 8”にて作品名“花魁-OIRAN”として発表した。(図7)



図6 キャロ姉妹のキモノ風の襟と裾のあるドレス(1908年頃)
(京都服飾文化研究財団「モードのジャポニズム」)



図7 花魁一 OIRAN

文 献

- 1) 谷田閔次, 石山彰『お茶の水女子大学家政学講座
9 服飾美学・服飾意匠学』(光生館, 1969年),
p.29-52
- 2) 深井晃子『ジャポニスム イン ファッション』(平
凡社, 1994年)
- 3) 小池三枝『日本服飾史』(光生館, 1989.1)
- 4) 九鬼周三『「いき」の構造』(岩波文庫, 1967.9)

(2008.3.28 受付 2008.5.19 受理)